
高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の時間外廊道じかんがいろついで

【Nコード】

N4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からない、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日？ になってから気づくのであった。

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする。人類の英知の結晶。

「あーうるさいな、誰だよ、こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがとでも分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。

どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つのため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

はつきり言おう。訳が分からない。俺の睡眠時間2分を返せ

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながらをは、またため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ち居と思うのは、新生活のスタートと言う出来事が加担しているのかもしれない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を二度も踏みたくはない。とはいえ、俺だつて、全く期待していないのは、嘘になる。そりゃ高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思っているのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のチェインメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺が学校に着き、自転車小屋へ我が愛車。まだ新車の19800円。命名『ギキユツパ』を駐車していると、校門の方から、馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かつて自転車を漕いで来る。

「よっおあ〜！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かつて来る悪友に、

どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走って行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやった。

「グットモーニング！」

「うふー！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言ったら分かる？ 佐伯 利

一俺の名前は、愛田 あいだ 千秋 ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなものからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴ろうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の女子生徒が

かつ、可愛い

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクス共」

「……………」

時が止まった気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てるど昇降口へと消えて行った。

第2話 1 - 3

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「……………」

時が止まったきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行った。

「……………おい、千秋」

その女子が立ち去った後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言った。
「何だ、馬鹿」

「高校つて怖えーな」

確かに、怖かったが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待ってよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒の学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受ける高校を調べて、同じところを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じところ受けやがって。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虐め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持っていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールムが始まるのは」

「おらああー！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を指し、前を向き歩きながら、我が、悪友を背中を見せながら右手を頭上へと持って行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そうそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言っていたが、俺はそれをスルーし。

何事もなかったように、スタスタと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなっていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1-3に入ると、いかにも、始まった感じのういういしさ溢れる光景が広がっている。話しをしている者、席に座って静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでい

る者、様々だ。まだ、慣れていというか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。げっ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さっき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。

普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしよう。

それから、数分後。教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」
ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！
頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリア？　なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　このクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所が無い。速やかに在るべきところへ帰れ。
「え？　此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しましたー！！」

そう言っつて、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3我がクラス内は、笑いに包まれた。
はあくアイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思つが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月17日01時49分発行